

海外レポート

英国図書館研修報告

あさ お ち か こ
浅尾千夏子
(三田メディアセンター)

1 はじめに

2014年9月から2015年1月までの約4か月半に渡り、英国海外研修の機会をいただいた。受入先であるセインズベリー日本藝術所のリサ・セインズベリー図書館を拠点とする英国研修は、2012年から開始され、筆者で3人目となる。今回の研修では以下を目標とし達成に努めた。①英国内で日本語資料を所蔵する図書館にて日本語コレクションに関わる支援を行う、②EAJRS会議へ出席し、見聞を深めるとともに慶應の取り組みについて発表する、③英国の大学図書館における研究支援や様々なサービス展開について知見を得るの3点である。

4か月半の研修期間中に、リサ・セインズベリー図書館の他に、3大学図書館での研修、3つの日本資料に関する会議への参加、6つの図書館への訪問が叶った。研修・訪問先と詳細日程については、図1に示したが、これら全てについて報告することが難しいため、本稿では慶應からの派遣者として今回初めて訪れた図書館、参加した会議を中心に報告することとする。

研修日程	訪問・見学先
9/14	英国着
9/17～20	EAJRS Annual Conference (ベルギー・ルーヴェン)
9/22～10/29	リサ・セインズベリー図書館
10/30～31	エジンバラ大学図書館
11/ 4	マンチェスター大学図書館
11/ 6	BLDSC
11/13	日本大使館、国際交流基金図書室
11/14	Japan Library Group Meeting
11/22～28	ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院図書館
11/25	London School of Economics Library
12/ 1～12	オックスフォード大学 ボドリアン日本研究図書館
12/ 2	NACIRA Meeting
1/ 5～15	ケンブリッジ大学図書館
1/16～30	リサ・セインズベリー図書館
1/31	帰国

図1. 研修・訪問先一覧

2 各研修先での過ごし方とトピック

(1) リサ・セインズベリー図書館

ノーフォーク州Norwichに位置するセインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館では約2か月間研修を行い、その間、日本資料の書誌データ修正作業や開架・閉架書庫の狭隘化対策として、資料の移動や除籍作業を行った。今回筆者の初めて取り組んだ事として、慶應の目録データベース上の書誌データを英国から利用してもらえるようにするべく、リサ・セインズベリー図書館とパリ日本文化会館図書館とのZ39.50接続作業が挙げられる。これらは、同じAlephユーザーである両図書館より兼ねてから希望があったもので、渡英前に準備していたものである。このほか、東京文化財研究所との共同データベース構築打合せや、国立近代美術館が主宰する海外日本美術資料専門家（司書）への支援、研修制度であるJALプロジェクト打合せ等にも同席させて頂く機会を得た。

(2) ロンドン大学

ロンドンの中心部、Russell Squareにあるロンドン大学東洋アフリカ研究学院図書館 (School of Oriental and African Studies, 通称 SOAS) では、1週間の研修期間中に和装本の糸綴じ修理のほか、日本学を学ぶ学生・教員向けのレクチャーを担当させて頂いた。また、近隣に位置するLondon School of Economics (通称LSE) 図書館、London School Business図書館へ訪問する機会を得た。各図書館とも利用者が非常に多く活気に溢れており、学生が国際色豊かであった。SOASは特にアジア、中近東の学生が多く、LSEは中国からの留学生が増加しているとのことであった。SOASのトピックとしては、2014年10月から次世代図書館システムKuali OLEを試験導入しており、同じロンドン大学系列であるBirkbeck図書館、Senate House Librariesの3図書館での共同利用することで、導入資金のコスト軽減を図っているとの事であった。なお、ディスカバリーインターフェースはEx Libris社のPrimo Centralを使用している。

(3) オックスフォード大学ボドリアン日本図書館

2週間に渡り受入れて頂いたオックスフォード大学ボドリアン日本研究図書館では、雑誌・新聞資料の整理作業を行いつつ、後述のNACIRA Annual Meetingへの参加の他、多くの関連図書館への訪問が叶った。具体的には2015年3月に正式オープンしたWeston Libraryや、2014年9月にオープンしたKB Chen Chinese Library、カレッジライブラリーのOriel、Queen's College Libraryにも訪問出来、英語圏最古の大学の伝統と規模を体感するとともに、それらを維持し利用に供するための組織と人材の豊富さを実感した。加えて、新しい試みとして“Research Skills Toolkit”や“Bodleian iSkills”といった、大学院生や若手研究者へのサポートプログラムを展開するなど、研究者育成に積極的に関わる姿勢を体感することが出来た。

(4) ケンブリッジ大学図書館

ケンブリッジ大学図書館では、書誌レコードの修正作業のほか、ケンブリッジ大学に在籍している日本学教員や各部署の担当者のインタビューをさせて頂き、日本研究者の生の声を聴くことが出来た。ケンブリッジ大学図書館は、データベース、電子ジャーナル、納本資料の電子化が進んだことによる機能や役割の変化の渦中にあるように見受けられた。具体的には、学部図書館との組織統合や大型書庫の検討、User Centred Service Design Project¹⁾（利用者を中心としたサービス設計プロジェクト）が進行中であり、新たな図書館像の確立が始まっている。

3 初めての大学図書館、会議

(1) EAJRS Annual Conference²⁾

9月17日から20日に渡りベルギーのルーヴェン大学で開催されたEAJRS（European Association of Japanese Resource Specialists：日本資料専門家欧州協会）第25回年次大会に参加させて頂いた。EAJRSは欧州において日本資料を扱う大学や組織に所属する図書館員や研究者を中心として構成されており、毎年年次大会を開催しているほか、NII（目録）ユーザーグループや、データベースを共同利用するEUコンソーシアムにも参加している。2014年大会では“Protection, Preservation and Restoration of Cultural Properties”と題し、資料の保存に関する問題や技術対策、展望をテーマとした29の発表が

あった。また、発表の後にはルーヴェン大学でのレセプションのほか、メインライブラリー、アジア図書室の見学、ブリュッセル王立美術歴史博物館所蔵の浮世絵コレクション見学ツアーも行われた。今大会は、英、仏、オランダ、ノルウェー、スウェーデンの大学図書館員や日本研究所員のほか、米、カナダ、そして日本からも国立国会図書館、国立情報学研究所、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター）から参加があり、総参加者は80名であった。



図2. EAJRS年次大会での発表の様子

EAJRSは、欧州の日本学部のある大学図書館や日本研究を行っている研究所にとって、重要なネットワーク形成の場となっている。日本語資料担当者が1名のみという図書館も多く、同様の問題を抱える図書館員が一同に集うことで、情報交換や問題解決を図る場であることを実感した。また、今回研修の始めの時期にEAJRS年次大会に参加出来たことで、欧州における日本資料の状況を知る機会を得たことは非常に有益であった。さらにその先の研修で訪問する図書館員の方に、あらかじめお会い出来たことや、逆に研修では訪問予定がない図書館についても、お話を伺える機会ともなった。

(2) NACIRA Meeting³⁾

オックスフォード大学図書館研修中の12月2日にNACIRA（National Committee for Information Resources on Asia Conference）年次総会に参加させて頂いた。NACIRAとは、イギリスにおけるアジア、中東研究に携わる研究図書館（図書館員、アーキビスト）が協力し、コレクション、情報資源へのアクセスを促進し改善することを目的とした組織で、2008年3月より活動を行っている。2014年年次総会は、オックスフォード大学のKB Chen China Libraryにて開催され、インドの長編叙事詩「ラー

マーヤナ」写本のデジタル化プロジェクトや、世界の考古学・美術情報検索サイト“CLAROS”⁴⁾に関する発表があった。総会にはSOAS, British Library, オックスフォード大学, ケンブリッジ大学, Royal Asiatic Society, Centre for Applied Buddhism, ウェストミンスター大学のスタッフが参加し, China, ヘブライ, 日本, 韓国, 中東, 南アジアの各図書館グループより活動報告がなされた。NACIRA総会への参加は, 日本資料を含めた英国におけるアジア地域資料の取り組みについて知る機会となった。

(3) エジンバラ大学図書館

英国の北部, スコットランドの首都にあるエジンバラ大学に今回初めて訪問する機会を得た。エジンバラ大学は1583年に創設された英国で最も古い6大学中の1校で, 3学部21学科から構成されている。5つあるキャンパスには, 学部生約2万, 大学院生約1万人が在籍している。

図書館は, 人文社会分野を対象とするメインライブラリーを中心に, 5つのキャンパスに計11館あり, 約400万冊の蔵書と160以上のデータベース, 4000以上の電子ジャーナルを提供している。図書館は, 大学のIT部門と図書館機能を統合し「Information Service部門」として組織化されており, スタッフは600名。エジンバラ郊外に大型保存書庫を建設したことで, 書庫があった6階部分はスペシャルコレクションフロアとして, 学生や地域利用者の貴重書閲覧や撮影フロアとして改修している。また, 日本語コレクションは大学の日本語教員と協力して選書しているほか, 日本学科を閉鎖したスターリング大学から寄贈されたコレクションで構成されているとの事であった。訪問した際には, 筆者から日本の現況として本学のデジタル化の活動や日本のオープンアクセスの動きについて, スタッフ向けに報告・発表させて頂いた。



図3. エジンバラ大学メインライブラリー入口

(4) マンチェスター大学図書館

イングランドの北西部に位置するマンチェスター大学は, 2004年に周辺大を再統合し大規模化した大学である。現在は, 学部生約2.5万, 大学院生約1万, 教員数2700人で本学とは協定校の関係にある。

図書館は, 人文科学, 教育, 医学, 科学, 社会科学をカバーするメインライブラリーのほか, 10館から成り, 400万冊の蔵書の他, 41,000の電子ジャーナル, 500,000の電子ブック, 数百のデータベースを提供している。図書館スタッフは200名である。

マンチェスター大学図書館の特徴的な試みとして, Books on demand サービス⁵⁾の試験導入が挙げられる。このサービスは, ディスカバリーシステム上のリクエストサービスで, 電子ブックの場合は試読ページにて5分以上閲覧すると図書館が購入する仕組みとなっている。利用者は, 紙の図書か電子ブックを選択し, リクエストすることが出来る。

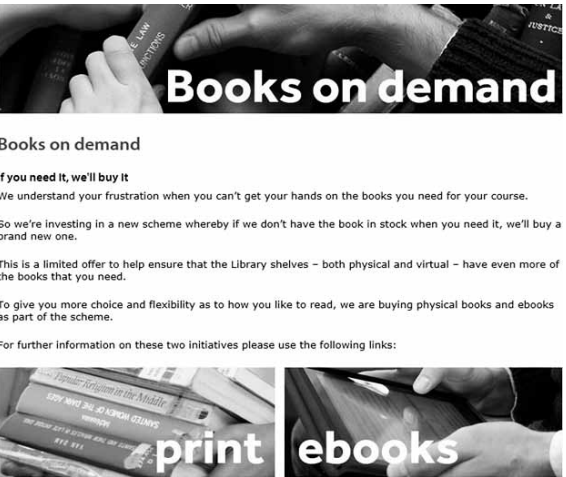


図4. Books on demandサービスページ

またマンチェスター大学では, ラーニングコモンズ棟をメインライブラリーから中庭を挟んだ位置に新設している。建物は地下1階地上4階建てで, カフェを併設し全フロアが学生のためのスペースとなっている。祝日以外は24時間利用可能であり, 棟内ではITサポートや図書館員による様々なレクチャーを実施しているとの事であった。施設は, グループ学習室, 映像処理用パソコン, ラウンジのほか予約可能な個室も用意され, 利用スケジュールがデジタルサイネージで確認出来るようになっている。



図5. マンチェスター大学ラーニングcommons棟

さらに、サブジェクトライブラリアンを中心として教育支援プログラム“My Learning Essentials”⁶⁾を推進しており、学習計画、文献管理、ライティングスキル、評価など多岐に渡るプログラムについて、オンラインチュートリアルと対面ワークショップの両面から提供している。

4 英国訪問を通じて感じたこと

(1) 英国大学の状況

ほぼ全ての大学が国立大学である英国においても、国からの補助金はここ数年頭打ちとなっており、各図書館では寄付金獲得に力を入れている。また英国の各大学の研究力を評価する“Research Excellence Framework”⁷⁾が4年に一度実施され、各大学の分野ごとに評価に基づいた研究資金が分配される。このような仕組みにより、世界レベルの研究と教育の質を維持し、大学としての競争優位を保っている事を実感した。

(2) 英国の大学図書館と慶應の共通点

オックスフォード、ケンブリッジ、エジンバラ大学等、英国の図書館でも書庫の狭隘化に伴う外部書庫の建設が次々行われており、資料移動後の空間は利用者スペースとして改装し提供される傾向にある。また、人材や資源の統合、スペシャルコレクションのデジタル化事業が、継続的に進められており、この点は日本の大学図書館の課題と共通している。一方で、今後の新しい研究を切り開いていくPh.D.を中心とした若手研究者へのサポートプログラムや、電子ブックへの移行の流れなどは、慶應を含めた日本の大学図書館にとっては、今後の課題であろう。

(3) 日本研究と図書館

今回、日本資料に関する図書館の研修や、各会議への参加を通じて、複数の方からお聞きしたのが、

日本について学びたい学生は増加し続けていて、それとともに研究の対象や質に変化が起きているとの事であった。一方で、中国研究が台頭していることもあり、アジアという国で見た抜歯、日本資料のための資金や人材の確保が難しくなっている現状からも目を背けることは出来ないと感じた。

5 おわりに

今回の研修を通じて、英国だけでなく欧州における日本研究や図書館の状況を知る機会を得たことは非常に貴重な体験であった。欧州という視点から見る日本資料は、国内から見る日本資料とは全く違う様相を呈していた。日本語という特殊な言語ゆえの苦労や日本語文献へのアクセスの不便さ等、難しい環境の中で館を超えてつながり、研究のサポートをしている姿を垣間見ることが出来、こうした状況に対して国内からのサポートの必要性を痛感し今後の進展を期待したい。

最後に、英国研修のマネジメントをして下さった、セインズベリー日本藝術研究所の平野さんを始め、受入れて下さった英国ライブラリアンの皆様、事前研修を引き受けて下さった本部の皆様、快く送り出してくれた日吉メディアセンタースタッフにこの場を借りて深く感謝したい。

注・参考文献

- 1) Cambridge University Library Annual report 2013-14
http://www.lib.cam.ac.uk/files/annual_report_1314.pdf
(参照 2016-02-01).
- 2) EAJRS <http://ejars.net/> (参照 2015-12-15).
- 3) NACIRA <http://nacira.org.uk/> (参照 2015-12-15).
- 4) CLAROS <http://clarosnet.org/XDB/ASP/clarosHome/>
(参照 2016-02-01).
- 5) Books on demand Service
<http://www.library.manchester.ac.uk/ourservices/servicesweprovide/booksondemand/ebooks/>
- 6) My Learning Essentials
<http://www.library.manchester.ac.uk/academicsupport/mylearningessentials/>
- 7) Research Excellence Framework 2014
<http://www.ref.ac.uk/> (参照 2015-12-15).
- 8) タイトラ、イヅミ. 英国・欧州の日本研究図書館との関わりにおいて (特集 外国から見た日本の専門図書館). 専門図書館. 2014, vol.268, p.2-7.
- 9) 平野明. 日没處の日本美術図書館. JAL2014公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」報告書.
http://www.momat.go.jp/am/visit/library/jal2014contents_j/
(参照 2015-12-15).